ど、自ら農地を取得して新たに就農した「新規参入者」が８人（同５人減）。十勝は後継者とされる人の就農が目立った。

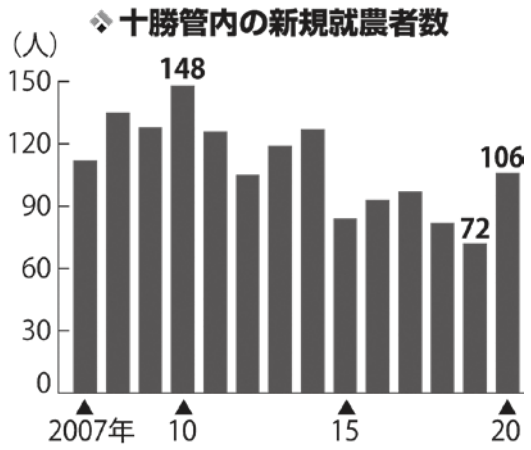
全道の新規就農者の増加は３年ぶり。振興局別では十勝が最も多く、空知（70人）、上川（68人）、オホーツク（52人）が続いた。いずれも農家戸数が多い地域で、この４局で全体の６割以上を占めた。

また、474人の経営形態をみると、畑作29.5％、稲作21.9％、酪農20.7％、野菜18.6％。また、就農時の年齢別内訳をみると、「Ｕターン」は40歳未満が全体の86％を占め、特に29歳以下の若年層が全体の過半数を占めた。

「新規参入者」は後志（24人）が最も多く、上川（15人）、空知（14人）が続いた。いずれも「野菜での就農が多い」（道農政部技術普及課）という。十勝は14振興局で７番目。年代別にみると、30代が39.7％、40代が31.0％。「就農には、ある程度の資金力が必要となるため」（同）とみる。50～60代は全体の11.9％だった。

新規就農者の増加は、食料自給率の向上につながるだけなく、農業の担い手確保にも直結。農業を支える重要な施策の一つだ。このため、道でも、30年までに新規就農者数を年間670人とする目標を設定している。

実態調査は、道内の新規就農者の実態を把握するため、各振興局が市町村、農業委員会などの協力で調査した上で、道農政部がまとめた。1994年から行われている。

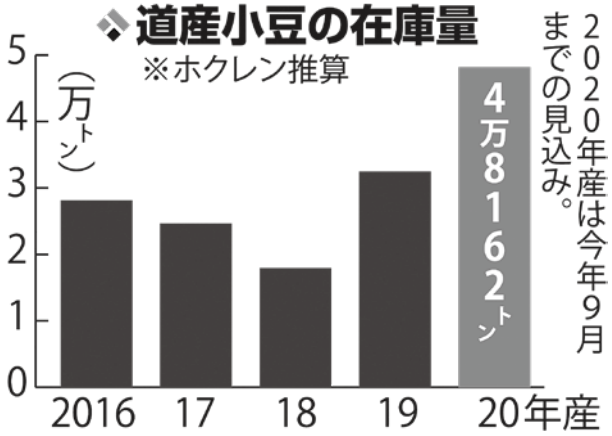


トピック

ブランド道産小豆に回帰　あん・菓子メーカー　輸入から転換　高い品質、供給安定　作付維持望む声も

2021年5月8日

全国の製あん・菓子メーカーで、原材料として使用する小豆を輸入品から道産品に切り替える動きが続いている。もともと、不作など道産の確保が難しくなった状況から輸入に切り替えていた業者が、在庫が増える道産小豆に回帰する流れだ。「ブランド」の道産の安定的な確保に向け、メーカーからは安定的な作付けを求める声も上がっている。

製あんメーカーなどで回帰の動きがある道産小豆

製菓、製パンメーカーにあんを卸す的場製餡（あん）所（東京）は、道産小豆の不足を受けて、２年前に３分の２をカナダ産小豆に切り替えたが、この春から主力を道産小豆に戻した。的場茂社長は「道産の方が品質が良い。２年前は切り替えざるを得なかったが、希望としては道産を使いたかった」と話す。